

## 日本語で意思疎通が困難な外国人患者を想定したシミュレーション演習 —看護大学生の学びの評価—

古川 智恵

### 要 旨

本稿の目的は、日本語で意思疎通が困難な外国人患者を想定したシミュレーション演習の学びを明らかにし、教授法への示唆を得ることである。本演習に参加し、同意が得られた80名の学生の演習終了後のレポートを分析対象とした。その結果、【コミュニケーションスキルを応用する】や【安心できる雰囲気を保つ】、【グローバル化に対応できる言語を習得する】、【外国人に対応できる院内環境を整備する】の4つのカテゴリーが形成された。本演習を通して学生は、看護師または患者の立場に立って、初めて病院を受診する患者の不安や看護師としての配慮の必要性について学んでいることが明らかとなった。さらに、本演習は患者理解を深める教授方法として、英語が苦手な学生にも、演習参加を促し、学びを深める教授方法として、効果があることが示唆された。

キーワード：看護大学生、外国人患者、医療英会話、シミュレーション演習

### I. 緒言

本邦における在留外国人数は2020年に288万人を超え、深刻な労働者不足の解消に対処する政策推進に取り組んでおり、今後も在留外国人数は増加することが見込まれる<sup>1)</sup>。2020年の在留外国人増加率を国別でみると、ベトナムが最も多く前年比+2.1%であり、在留外国人数では、中国、韓国に次ぐ第3位となっている<sup>2)</sup>。このようなアジア人が多くを占める在留外国人の医療を巡る問題については、日本語または英語による意思疎通が難しいため、医療現場でのコミュニケーションの壁による診療の質、患者権利の侵害の問題などが指摘されている<sup>3), 4)</sup>。さらに文化・宗教などの慣習の違いに対して適切に対応するための異文化理解を含めたコミュニケーションへの対策が喫緊の課題であるが、臨床の現場で日本人看護師に対する異文化理解を含めたコミュニケーションを高める教育は十分な体制が整っていないのが現状である<sup>5)</sup>。

看護基礎教育における異文化理解を含めたコミュニケーションに対する取り組みとして、看護大学1年生を対象とした看護英語教育プログラムの実施<sup>6)</sup>や当事者参加授業<sup>7)</sup>、タイ王国看護大学生の受け入れに関する取り組み<sup>8)</sup>、外国人模擬患者演習報告<sup>9)</sup>はみられるが、看護大学生に在留外国人患者を想定したコミュニケーション

ン演習を行い、その評価を行った報告は見当たらない。A大学では、看護学部3年生を対象に1単位15時間で「クリニカルコミュニケーション」が必修科目としてカリキュラム構成されている。本稿では、日本語で意思疎通が困難な外国人患者が受診することについて看護師および患者の視点で捉え、演習を通じた学びが多様化する医療現場での看護実践に反映できることを狙いとして実施した。

そこで本稿では、日本語で意思疎通が困難な外国人患者の事例を用いたシミュレーション演習の学びを明らかにし、教授法への示唆を得ることを目的とした。

### II. 方法

#### 1. 研究デザイン

質的帰納的研究

#### 2. 「クリニカルコミュニケーション」の講義の内容

講義は、表1に示すように、3年生前期、1単位15時

表1 「クリニカルコミュニケーション」シラバスの概要  
(3年次前期:1単位15時間)

回数	テーマ
1回目	初対面の対応
2回目	症状の把握
3回目	患者のプロフィールと症状の把握
4回目	バイタルサインの測定
5回目	検査と処置の説明
6回目	病院内のオリエンテーション
7回目	演習
8回目	演習

間（8コマ）で実施した。1～6回目は、書く、聞く、読む、話す、の4技能を総合的にバランスよく学修できるように<sup>10)</sup>、それぞれのテーマに沿った看護師と患者の1分程度の会話を著者が作成し、作成した資料に出現する1) 医療英単語の確認を行い、2) ネイティブによる会話文のリスニングを4～5回繰り返したあと、会話文の内容の確認を行った。3) その後、2人1組になって看護師と患者役になって交互に会話の練習を行った。4) さらに、各回のテーマに関する300字程度の医療英語の英文読解を行った。

### 3. 日本語で意思疎通が困難な外国人患者を想定したシミュレーション演習（以下、演習）の概要

演習は7・8回目で2コマ（180分）実施した。演習の目的は、日本語で意思疎通が困難な外国人患者に必要な対応について理解を深める、日本語で意思疎通が困難な外国人患者の病院受診時の問題について理解を深める、である。演習の目標は、1) 日本語で意思疎通が困難な外国人患者に必要な看護を考察できる、2) 既修の知識・技術を活用して、問診や検査の説明ができる、3) 日本語での意思疎通が困難な外国人患者が病院を受診することに伴う苦痛を説明できる、とした。

事例は、「Bさん（30歳、女性）は、ネパール連邦民主共和国の出身で、先に日本に来てネパール料理店を営んでいる夫を頼って3か月前に来日した。Bさんの母国語はネパール語で日本語はほとんど話せず、読み書きも困難である。英語も片言で単語が少しわかる程度である。数日前から頭痛があり、食欲もなく、今朝から発疹が出てきた。体温を測ると38.2度あったため、自宅近くの病院を受診した。夫は、仕事のため来院できず、一人で受診した。既往歴はなく、宗教はヒンズー教（牛肉・豚肉禁食）。保険は、夫が社会保険に入っているため扶養家族である。

課題は、2人ペアになって交代で看護師役・患者役になり、以下の演習を行った。ただし、日本語はほとんど通じないとした。

演習では、図1に示すように、各テーブルの間隔をあけて教室配置を行い、それぞれに必要な物品を準備した。1) 15分のオリエンテーションの後、2) 看護師役としてBさんに(1)バイタルサインの測定、(2)1階の現在地から2階の採血室（特定の教室を指定）に案内するための伝え方について既修の知識・資料を参考にして、個人で検討する時間を75分設けた。3) 5～6人1グループとして15Gを作成し、看護師役1名、患者役1名、観察者

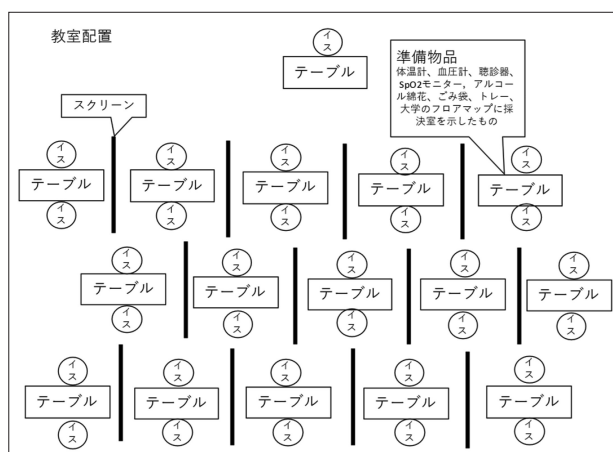


図1 演習時の教室配置

3～4名に分かれて1ローテーション20分で3ローテーションを60分行った。4) グループ間や全体でデブリーフィングを25分行った。5) 最後に全体のまとめを5分行った。教員は、学生に「自分が看護師やAさんの役割を演じてどのような学びがあったか」をそれぞれの立場で考えるよう助言した。演習後、学生は「演習を通しての気づき・学び」をA4 1枚程度のレポートあるいはメモ等にまとめた。

### 4. 協力者

演習参加者87名のうち、演習に参加しレポートを提出した85名の学生とした。

### 5. データ収集方法

「クリニカルコミュニケーション」における日本語で意思疎通が困難な外国人患者を想定した演習を行ったあと、レポートを回収した。成績判定後、レポートは返却し、レポートの活用に同意のあった学生のレポートを改めて回収した。

### 6. 用語の定義

学び：「クリニカルコミュニケーション」における日本語で意思疎通が困難な外国人患者を想定した演習を通して学生が得た知識・技術だけでなく、気づきや理解を含む。

シミュレーション演習：シミュレーション<sup>11)</sup>とは、現実の物事または過程の構造ないし力動を実際に再現するもの（モデル）であって、参加者がそれを用いて実際に体験するのと同じように人や物にかかわり、これまで学んできた知識を応用して問題ないし状況に対して反応（意思決定と行為）するものをいい、本稿では、事例を

用いた講義で患者像を想起したあと、日本語で意思疎通できない外国人患者に必要な援助について看護師または患者になりきって、与えられた場面で反応し、反応の結果を考察する演習とした。

## 7. データ分析方法

データ分析方法は、「クリニカルコミュニケーション」における日本語で意思疎通が困難な外国人患者を想定した演習後のレポートの記述内容をデータとし、Berelson, Bの方法論を参考にした看護教育学における内容分析の方法に基づいて行った<sup>12)</sup>。文脈単位は、学生の演習の学びに関する記述内容全体とし、記録単位は、「学生は日本語で意思疎通が困難な外国人患者を想定した演習を通してどのような学びを得たのか」という問いに対する答えを一つ含むセンテンスとした。個々の記録単位の意味内容の類似性に従い分類し、分析を繰り返してカテゴリー化し命名した。カテゴリーの信頼性確保のため、データを何度も繰り返し読みながら分析を行った。また、カテゴリーの分類の一致率をスコットの式に基づき算出した<sup>13)</sup>。これは、分離され得る偶然性と結果の共起を統制する信頼係数であり、信頼性の判断基準を70%とし、質的研究の経験豊富な大学教員との間で一致率が70%以上になるまで繰り返し検討した。

## 8. 倫理的配慮

協力者には、演習に先立ち、レポートのその後の活用の目的と方法について集团的に説明を行った。レポートの活用への同意は自由意思に基づくこと、同意の有無によって不利益を生じないこと、最終的な同意書の取得は成績確定後行うため、同意の有無が成績には反映されないことについて説明した。成績確定後、学生が集合する機会に依頼文をもとに目的や方法、レポートの活用に同意後でも、同意日から14日以内は取りやめができること、分析の際は無記名で行うことなどを説明した。また、データの使用目的と管理、守秘義務、結果の公表についても説明した。レポートの活用への意思は同意書への署名によって確認した。本取り組みは、A大学研究倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号：2019-06）。

## Ⅲ. 結果

レポート提出者85名のうち協力の同意が得られた80名（94.1%）の課題レポートを分析した。80名の記述から476の記録単位が抽出された。このうち抽象度の高いものや主語と述語が一致していないなど意味不明な記述を

除外し、456記録単位を分析した。カテゴリーの分類への一致率は80.1%であり、信頼性が確保されていることを示した。その結果、日本語で意思疎通が困難な外国人患者を想定した演習における学生の学びとして21のサブカテゴリーから最終的に4つのカテゴリーが形成された（表2）。以下、【 】はカテゴリー、〈 〉はサブカテゴリー、[ ]はカテゴリーを形成した記録単位数と全記録単位456に対する割合を示した。

【コミュニケーションスキルを応用する】について学生は、日本語で意思疎通が困難な外国人患者とのコミュニケーションを図るため、〈ジェスチャーなど身振り手振りをを用いてコミュニケーションをとる〉や〈非言語的コミュニケーションを活用して伝える〉、〈数字を手で示すなどのジェスチャーを活用する〉ことを学んでいた。また、病気のため受診した患者に対して〈コミュニケーションをとることだけでなく体調の悪い患者に配慮する〉や〈患者が正しい医療が受けられるよう調整する〉ために、【コミュニケーションスキルを応用する】必要性を学んでいた。

【安心できる雰囲気を保つ】について学生は、意思疎通が困難な患者の不安を理解し、外国人患者が安心できるよう〈一生懸命伝えようとする看護師の姿勢が患者を安心させる〉や〈患者が安心できる雰囲気を作る〉ことで【安心できる雰囲気を保つ】ことの必要性を学んでいた。

【グローバル化に対応できる言語を習得する】について学生は、医療者として外国人患者に対応できるよう、〈普段の看護実践を英語で説明できるか考える〉や〈実際の場面を想定して実践レベルでシミュレーションを行う〉など、【グローバル化に対応できる言語を習得する】必要性を学んでいた。

【外国人に対応できる院内環境を整備する】について学生は、今後病院で働くことを意識して、外国人患者が安心して病院を受診できるよう〈多言語の病院のパンフレットや地図を準備する〉や〈外国人患者を想定した外国人対応チーム医療連携を組織する〉、〈継続支援体制を整える〉へ【外国人に対応できる院内環境を整備する】必要性を学んでいた。

## Ⅳ. 考察

### 1. 演習における学生の学び

【コミュニケーションスキルを応用する】として学生は、演習内容について、日本語での意思疎通が難しい外国人患者の設定であるために、コミュニケーションを図

表2 日本語で意思疎通が困難な外国人患者を想定した演習における学生の学び

n=456

カテゴリ	サブカテゴリ	代表的な記録単位
コミュニケーションスキルを応用する [212記録単位:46.5%]	一つ一つわからないところを確認しながら説明する [62記録単位:13.6%]	一つ一つ確認しながら説明する
	ジェスチャーなど身振り手振りをを用いてコミュニケーションをとる [59記録単位:12.9%]	わかりやすい言葉で説明し理解できているかを確認しながら実施する 目線を合わせて患者の理解を確認しながら説明する ジェスチャーなど身振り手振りをを用いたコミュニケーションを行う ジェスチャーを交えてコミュニケーションをとることで意思の疎通が図れる
	身振り手振りや絵を用いて説明するなどコミュニケーション方法を工夫する [30記録単位:6.6%]	身振り手振りや絵を用いて説明するなどコミュニケーション方法を工夫する 伝わりやすい単語選択や地図などを用いてコミュニケーション方法を工夫する
	非言語的コミュニケーションを活用して伝える [18記録単位:4.0%]	非言語的コミュニケーションを活用する
	数字を手で示すなどのジェスチャーを活用する [12記録単位:2.6%]	表情や態度を含めた非言語的コミュニケーションを用いて伝える 数字を手で示すなどのジェスチャーが患者理解を促す 共通理解可能な絵やジェスチャーを活用する
	患者の文化や生活背景をふまえて対応する [10記録単位:2.2%]	患者の文化や生活背景に配慮して対応する
	コミュニケーションをとることで体調の悪い患者に配慮する [8記録単位:1.8%]	患者の文化や生活背景を踏まえて臨機応変に対応する
	相手の理解の状況を考えながらコミュニケーションをとる [6記録単位:1.3%]	コミュニケーションをとることで体調の悪い患者に対して配慮する
	患者が正しい医療が受けられるよう調整する [5記録単位:1.1%]	相手の理解の状況を考えながらコミュニケーションをとる 図や絵を用いて正確に聞き取ることで正しい医療が受けられるよう調整する
	言葉が通じないことによる患者の不安に配慮する [38記録単位:8.3%]	言葉が通じないことによる患者の不安に配慮する わからない医療英語で説明される患者の不安を理解する
安心できる雰囲気を保つ [136記録単位:29.8%]	一生懸命伝えようとする看護師の姿勢が患者を安心させる [35記録単位:7.7%]	一生懸命伝えようとする看護師の姿勢が患者の不安の軽減につながる 説明だけでなく案内するなど行動によって患者を安心させる
	患者が安心できる雰囲気を作る [34記録単位:7.5%]	患者が安心して不安を表出しやすい雰囲気を作る できるだけけいさき添い安心できる雰囲気を作る
	笑顔やポジティブな態度を保つ [28記録単位:6.1%]	看護師の笑顔や態度が患者に与える安心感を与える 笑顔で接することで患者の不安軽減につながる
	基本的な看護英会話を学習する [28記録単位:6.1%]	実際の場面で活用できるような基本的な英会話を学習する 英会話だけでなく他の言語の学習の必要性
	普段の看護実践を英語で説明できるか考える [22記録単位:4.8%]	患者の理解に合わせた説明方法を工夫する 普段から英語でも表現できるか考える機会を持つ
	実際の場面で想定して実践レベルでコミュニケーションを行う [19記録単位:4.2%]	実際の場面で想定して実践レベルでコミュニケーション学習しておく 外国人患者を想定した状況に応じたイメージトレーニングを行う
	様々な状況を見据えて繰り返し学習する [11記録単位:2.4%]	様々な状況を見据えて繰り返し学習する 外国人患者を想定した学習を意識して行う
	海外研修を活用して英語力を強化する [2記録単位:0.4%]	海外研修を活用して英語力の強化につなげる
	多言語の病院のパンフレットや地図を準備する [25記録単位:5.5%]	病院内にパンフレットや図を多言語で用意しておく わかりやすい案内表示にする
	外国人患者を想定した外国人対応チーム医療連携を組織する [1記録単位:0.2%]	外国人患者を想定したチーム医療を組織する
外国人に対応できる院内環境を整備する [27記録単位:5.9%]	継続支援体制を整える [1記録単位:0.2%]	自宅に戻った後の相談窓口の明確化しておく

るため、多様なジェスチャーの方法を用いて、伝え方を工夫していた。四方<sup>14)</sup>は、ジェスチャー、表情、アイコンタクト等の非言語コミュニケーションを学ぶ際には、視覚から学ぶ方法が効果的であると述べている。今回の演習でも、学生は医療機器やフロアマップといった医療機器や資料を用いて、患者の表情や反応を確認しながら、〈一つ一つわからないところを確認しながら説明する〉ことができていた。このことは、これまでの講義に加え、演習当日に個人で検討する時間を75分間設けたことで、どのように医療機器や資料を活用すると、患者へ効果的に説明できるのかを考える時間として活用することができたのではないかと推察される。また、英語のネイティブではなく、英語も理解が難しい患者設定にしたことで、英語が苦手な学生も、英語が不十分でも他の方法を活用することで意思疎通を試みることができ、演習に参加しやすかったのではないかと考える。しかしながら、今回の演習で設定したネパール人女性の文化的背景や生活習慣を踏まえて、コミュニケーションを工夫した記述がみられなかった。A大学において、国際看護論は4年生の必修科目となっており、学生が既修の知識を応用することが難しく、また、ネパール人が身近な存在でないため、文化的背景や生活習慣を踏まえての実践にはつながりにくかったのではないかと推察される。学生の生活体験の状況を踏まえて患者設定を検討する必要があるのではないかと考える。さらに学生は、〈コミュニケーションをとることだけでなく体調の悪い患者に配慮する〉など看護師として患者の体調を気遣いながらコミュニケーションをとることの必要性を学んでいた。宮津ら<sup>9)</sup>は、外国人模擬患者演習においてシミュレーション演習は、異文化を持つ患者であっても、症状に苦しみ、病に不安を持つ患者の心に看護職として向き合う重要性を学ぶ機会となっていると述べている。本演習に参加した学生も、外国人患者の状態に気を配り、【コミュニケーションスキルを応用する】ことで、看護師としての役割を果たしていた。このことは、基礎看護学を履修し、看護学実習を経験している学生だからこそ、患者を気遣いながらコミュニケーションをとることにも配慮できていたのではないかと考える。このことから、日本語で意思疎通ができない外国人患者を想定した演習は、学生が既修の知識・技術を活用して、患者の立場に立って説明ができるために効果的な学習方法であったと考える。

演習を通して学生は、日本語で意思疎通が困難な外国人患者の立場に立って【安心できる雰囲気を保つ】ことの必要性を学んでいた。患者にとって看護師は安心して

頼れる存在であり、頼られる存在となるために、〈患者が安心できる雰囲気を作る〉よう表情や態度を意識する必要がある。阿部<sup>15)</sup>は、臨床の事象を、学習要素に焦点化して再現した状況のなかで、学習者が人やものに関わりながら医療行為やケアを経験し、その経験を学習者が振り返り、検証することによって、専門的な知識・技術・態度の統合を目指す教育（学習）と定義している。本演習に参加した学生も、患者役を体験することで、言いたいことが伝わらない患者の気持ちを理解し、看護師として患者の気持ちに配慮することの大切さに気づけたのではないかと考える。これらのことから、学生は、患者役を経験することで患者の立場に立って、看護師に必要な【安心できる雰囲気を保つ】看護として知識・技術・態度を統合する学びが得られていたと考える。

【グローバル化に対応できる言語を習得する】として学生は、これまでの講義資料を確認しながら、実際に患者が受診する場面やバイタルサイン測定をする手順をイメージし、どのように説明するとわかりやすく伝えることができるかを思考しながら、演習の準備に取り組んでいた。信谷ら<sup>16)</sup>は看護英語教育における様々な話題を概念化していく過程には、日本語での背景知識が役立つこと指摘しており、学生は、既修の知識を最大限に活用して演習に取り組んでいた。今回の演習のように、学生自身で考え既修の知識を活用できる演習は、どのように説明するとわかりやすいか、これまでの説明方法は相手にとってわかりやすいものであったか、など学生自身の看護技術を振り返る機会となり、学びを深めることに繋がったのではないかと考える。また、実際の場面を想定しながら、言語化していく段階で、【グローバル化に対応できる言語を習得する】必要性を認識していた。このことは、たんに〈基本的な看護英会話を学習する〉だけでなく、〈実際の場面を想定して実践レベルでシミュレーションを行う〉や〈普段の看護実践を英語で説明できるか考える〉ことに繋がっており、演習を通して学生は、看護師になった自分自身を思い描き、外国人患者に真摯に向き合おうとする中で、さらに語学を習得しておくことの必要性を学んでいた。服部<sup>17)</sup>は、会話主体の講義形式にすることで、より実践的かつリアリティーのある講義ができると述べており、本演習でも、学生が実際の場面を想起し、コミュニケーションの方法を考えることで、実践的でありリアリティーのある演習となっていた。

【外国人に対応できる院内環境を整備する】として学生は、演習を通して、学生は、既存の掲示や資料では、外国人が安心して医療機関を受診できないことに気づ

き、これからのさらなるグローバル化に向けて、現在の医療の問題点について考えることができていた。院内掲示、パンフレットの作成や、多言語対応のサポート体制の院内整備ははまだ十分とは言えず<sup>18)</sup>、院内環境を整備していくためには、本演習を経験した学生が、実践の場で活躍することが望まれる。

以上のことから、本演習は患者理解を深める教授方法として、英語が苦手な学生にも、演習参加を促し、学びを深める教授方法として、有効な教授方法であると考えられる。

## 2. 演習の限界と今後の課題

本演習の結果は、演習を通しての学生の学びの記述のため、学生が演習を行って、理解しにくかったこと、困難に感じたことについてレポートから読み取ることができなかった。演習をさらに発展させていくためには、学生の演習に対する考えが記述できるような研究のための問いを検討する必要がある。また、本演習の事例であるネパール人女性について学生がこのような外国人患者と出会う経験はほとんどなく、患者像をイメージしづらかったのではないかと考える。学生の生活体験の状況を踏まえて患者設定を検討する必要がある。今後は、学生の学修がより深まるよう、日本語が話せない外国人患者が病院を受診するとき、言葉だけでなく、文化や生活習慣の影響を考えて、実践に応用できる授業設計となるよう、検討する必要がある。

## V. 結論

本演習では、看護大学生に、日本語で意思疎通が困難な外国人患者を想定したシミュレーション演習を行った。その結果、【コミュニケーションスキルを応用する】、【安心できる雰囲気を保つ】、【グローバル化に対応できる言語を習得する】、【外国人に対応できる院内環境を整備する】の4つのカテゴリーが抽出された。学生は、看護師や患者の立場に立って学んでおり、患者理解を深める教授方法として、本演習は、英語が苦手な学生にも、演習参加を促し、学びを深める教授方法として、効果があることが示唆された。

## 謝辞

本稿の演習の評価に協力頂きました協力者の皆様に深謝いたします。また、本稿をまとめるにあたり、ご助言いただきました三重県立看護大学荻野妃那先生に心からお礼申し上げます。

本演習の評価は、A大学看護学部研究助成金を受けて実施した。

## 利益相反

本演習の評価における利益相反は存在しない。

## 文献

- 1) e-Stat政府統計の統計窓口(2019):統計でみる日本 国別・地域別在留資格(在留目的)別在留外国人 独立行政法人統計センター, 2021年7月14日, <https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=datalist&toukei=00250012&tstat=000001018034&cycle=1&year=20200&month=12040606&tclass1=000001060399&tclass2val=0>
- 2) 出入国在留管理庁(2020):2020年6月末現在における在留外国人数について, 2021年7月14日, [http://www.moj.go.jp/isa/publications/press/nyuukokukanri04\\_00018.html](http://www.moj.go.jp/isa/publications/press/nyuukokukanri04_00018.html)
- 3) 国井修, 野見山一生:外国人の医療に関する研究(1) 栃木県下医療機関の実態調査, 日本衛生学会誌, 48, 317-320, 1993.
- 4) 澤田貴志:働く人と健康 診療所医師の立場から外国人労働者の健康問題, 公衆衛生, 74(8), 697-700, 2010.
- 5) 久保陽子, 高木幸子, 野元由美, 他:日本の病院における救急外来での外国人患者への看護の現状に関する調査, 厚生学の指標, 61(1), 17-25, 2014.
- 6) 落合亮太, 松本裕, 大河内彩子, 他:看護大学1年生を対象とした看護英語教育プログラムに関する実践報告, 横浜看護学会誌, 10(1), 29-35, 2017.
- 7) 古場真理, 澤田孝子, 大草知子:国際看護教育における当事者参加授業の学習効果, 日本医学看護学教育学会誌, 26(2), 46-51, 2017.
- 8) 辻村真由子, 和住淑子, 池崎澄江, 他:タイ王国コンケン大学看護学部生受け入れプログラムの開発・実施と評価, 千葉大学大学院看護学研究科紀要, 40, 73-79, 2018.
- 9) 宮津多美子, 藤倉ひとみ, グロウ・デボラ:シミュレーションで学ぶ異文化看護の実践 看護学生を対象とした外国人模擬患者演習報告, 医療看護研究, 14(2), 9-18, 2018.
- 10) 藤田寿一:大阪市立大学医学部看護学科におけるComputer Assisted Language Learning (CALL) 様システムの構築と導入 看護英語授業での試み, 大阪市立大学看護学雑誌, 14, 17-24, 2018.
- 11) Rheba de Tornay, Martha A. Thompson: Strategies

- for teaching nursing, 27, Delmar Publisher, New York, 1987.
- 12) 舟島なをみ：質的研究への挑戦（第2版），51-79，医学書院，東京，2009.
  - 13) ダニエル・リフ，ステイーブン・レイシー，フレデリック・フィコ（著）/日野愛郎（監訳）/千葉涼，永井健太郎（訳）内容分析の進め方—メディアメッセージを読み解く，169-170，勁草書房，東京，2018.
  - 14) 四方雅之：英語授業に生かす視聴覚教材 視聴教育の目的と実践，語研ジャーナル，6, 5-14, 2007.
  - 15) 阿部幸恵：臨床実践家を育てる！看護のためのシミュレーション教育の導入 基本的な考え方と事例，15，医学書院，東京，2013.
  - 16) 信谷美智子，松原みゆき：医学英語を効果的に教育するための一考察 看護英語の取り組み，看護学統合研究，7(1)，19-22, 2005.
  - 17) 服部しのぶ：実務からみた医療英語教育，Journal of Medical English Education, 17(1)，42-44, 2018.
  - 18) 中田知廣，藤澤望美，山田貴子，他：兵庫県の医療機関における外国語意識調査を通じた外国人医療の課題，国際保健医療，26(4)，331-340, 2011.